



エリヤはバアルの預言者 450 人を向こうにまわして、バアルの神と主なる神のどちらが祭壇のたきぎやいけにえの雄羊に火をつけることができるか。両者が対決することになりました。1 対 450。場所はカルメル山です。

1. バアルの預言者たち (25~26 節)

①対決開始 (25) 「エリヤはバアルの預言者たちに言った。『あなたがたで一頭の雄牛を選び、あなたがたのほうからまず始めよ。人数が多いのだから。あなたがたの神の名を呼べ。ただし火をつけてはならない。』」いよいよ始まります。エリヤはバアルの預言者たちに、先を譲りました。「あなたがたの方が多数なのだから、まずあなたがたの神の名を呼べ」と言って、開始を促します。条件は火を自分たちでつけないというものでした。要するに、バアルの神に火をつけさせよという事です。

②叫ぶバアルの預言者達 (26) 「そこで、彼らは与えられた雄牛を取ってそれを整え、朝から真昼までバアルの名を呼んで言った。『バアルよ。私たちに答えてください。』」そこで、バアルの預言者達は一頭の雄牛をとって、それを屠り、たきぎの上に載せたのです。そして、朝から真昼に至るまで、バアルの神の名を呼び続けたのです。『火をつけてください。私たちの叫ぶ願いに答えてください。』と必死でした。

③踊り回る預言者達 (26) 「しかし、何の声もなく、答える者もなかった。そこで彼らは、自分たちの造った祭壇のあたりを、踊り回った。」しかし、バアルの神から応えはありません。何の声も、答える者もなかったのです。バアルの預言者達ができることといえば、彼らが造った祭壇の近くで、踊り回るしかなかったのです。できるだけ賑やかに、威勢を良くするしかありませんでした。自分たちで盛り上がらせるしかなかったのです。

2. 答える者もなく (27~29 節)

①彼らをあざけり (27) 「真昼になると、エリヤは彼らをあざけて言った。『もっと大きな声で呼んでみよ。彼は神なのだから。きっと何かに没頭しているか、席をはずしているか、旅に出ているのだろう。もしかすると、寝ているかもしれないから、起こしたらよかろう。』」エリヤは真昼になっても、何の反応がないのを見て、預言者達をあざけります。そして、さらに大声を上げるように勧めました。バアルの神はどうしているのかと問い、きっと忙しいのか、そこにはいないのか、旅にでも出ているのか、寝ているのかと、皮肉を込めて言うのでした。エリヤはアハブ王夫妻や預言者が信ずるバアル神が、無力な偶像であることを伝えたかったのです。

②身を傷つけて (28) 「彼らはますます大きな声で呼ばわり、彼らのなら

わしに従って、剣や槍で血を流すまで自分たちの身を傷つけた。」バアルの預言者達はさらに大きな声で叫ぶだけです。そして、剣や槍を用いて自傷しました。カナンでは願いが伝わりやすいと考えられていたからです。しかし、イスラエルの律法では禁じられていた行為です（申命記 14:1）。

- ③答える者もなく（29）「このようにして、昼も過ぎ、ささげ物をささげる時まで騒ぎ立てたが、何の声もなく、答える者もなく、注意を払う者もなかった。」こうして朝から始まった、預言者達の祈禱は午後にもまで及びました。ささげものをささげる時がくるまでも、うるさいほどに叫び続けました。しかし、応えはありません。何の声も、答える者もあられなく、反応の兆候もありませんでした。

3. エリヤの祈禱への備え（30～35 節）

- ①民は近寄り（30）「エリヤが民全体に、『私のそばに近寄りなさい。』と言ったので、民はみな彼に近寄った。それから、彼はこわれていた主の祭壇を建て直した。」さて、バアルの預言者達の試みが功を奏さないなか、エリヤの番になりました。彼は主なる神に頼りつつ、なんとしても答えをいただきたいと思っていたことでしょう。そこでエリヤは改めて主の前に出て、姿勢を正し、この大きな試みに臨んだのです。まずは、民全体に言いました。『私のそばに近寄りなさい。』それは、エリヤ自身に注目してもらおうとしたのではないのです。本来の主である神のみわざを見てもらいたいという願いがそう言わせたのです。民は言われるがまま、エリヤに近づいて来ました。そこで、エリヤは壊れていた主の祭壇を建て直しました。
- ②十二の石を（31～32）「エリヤは、主がかつて、『あなたの名はイスラエルとなる。』と言われたヤコブの子らの部族の数にしたがって十二の石を取った。その石で彼は主の名によって一つの祭壇を築き、その祭壇の回りに、二セアの種をいれるほどのみぞを掘った。」「ヤコブの生涯」については昨年学びました。ヤコブの渡りでヤコブはひとりだけ残り、夜明けまで、神と格闘したという記事があります（創世記 32 章）。その時に「あなたはもうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。」と言われたことがありました。ヤコブ（イスラエル）には 12 人の子どもがいて、その子孫たちが部族を形成するようになります。エリヤは今、その 12 という数を記念して、12 の石を取り、主の名に唱えつつ、祭壇を築いたのです。そして、その祭壇の周りには、2 セアの種を入れるほどの溝を掘ったのです。1 セアは 7.6 リットルですから 2 セアは 15.2 リットル。
- ③水を三度注ぎ（33～35）「ついで彼は、たきぎを並べ、一頭の雄牛を切り裂き、それをたきぎの上に載せ、『四つのかめに水を満たし、この全焼のいけにえと、このたきぎの上に注げ』と命じた。ついで『それを二度せよ。』と言ったので、彼らは二度そうした。彼は、『三度

せよ』と言ったので、彼らは三度そうした。水は祭壇の周りに流れだした。彼はみぞにも水を満たした。」その上で、エリヤは雄羊を屠り、祭壇の上のたきぎの上に載せました。そして、四つのかめに満ちた水を、全焼のいけにえである雄牛とたきぎの上にかくように命じました。二度、三度とそうさせました。すると、水は祭壇の周りに流れ出しました。その上で、エリヤは掘られた溝にも水を満たしたのです。こうなると、祭壇の火はつきにくい状態になったといえます。この後、どうなるのでしょうか。

《結論》 今朝の聖書箇所は、エリヤがバアルの預言者達との対決に始まり、バアルの預言者達による数をもつての願いは届かなかった様子がえがられます。一方、エリヤは主に祈り求めるための準備をはじめました。

今朝は 27 節に注目していきたいと思います。ここにおいて、エリヤは真昼になってもバアルの神が答えてくれないことをみて、預言者達をあざけています。ある方はこのようなエリヤの態度について、「あざけることまでしなくて良いのでは」と思われるかもしれません。しかも、その後には皮肉たっぷりの言葉を述べています。450 人を相手にして、大きなプレッシャーもありました。しかし、エリヤは怖じることなく語っているのです。大変な勇気であると見た方が良いでしょう。それに、その後記されている皮肉と思われる言葉の内容は、偶像の本質をもの見事についているのです。つまり、「もっと大きな声で呼んでみよ。彼は神なのだから。」とあって、バアルが神ならば必ず答えてくれるはずなのに答えがない。とすると、それは第一に何かに没頭していて声が聞こえないのだろうか。第二に席を外していて気が付かないのだろうか。第三に旅に出ていて声が届かないのだろうか。第四に寝ているのかもしれないから、起こしたらどうだろうかと言っていて、預言者エリヤは人々が偶像崇拜の問題点を民にも理解させようとしているのです。

聖書の神は、15 節で「私が仕えている万軍の主は生きておられます。」とエリヤが語っているように、まさに生々しく私たちに関わってくださる方です。その主は、一つの課題に関わっていても、無数の課題に同時に対応できる方です。また、天から私たちがどこにいたとしても、どのような場面であったとしてもご覧くださる主です。また、主にとってはいかに遠く離れているように見えても、私たちの声を聞いてくださる方です。詩篇 139:2 には「あなたは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読みとられます」とあります。また、主は人間のように、眠ることはありません。「主はあなたをよろけさせず、あなたを守る方はまどろむこともない」（詩篇 121:3）とあるとおりです。

このように、バアルのような偶像神と、生ける主なる神とでは、本

質的に異なっているのです。それなのにどうして人は偶像神に魅かれるのでしょうか。偶像は、非常に人間的であるというところに一因があるでしょう。人間の欲得、自己中心的な考えなどに、都合よく作用するからでしょう。要するに、偶像神は人間中心なのです。主なる神は生きておられるのですから、私たちの都合で動かれるのではありません。私たちは、どのような神に従うのですか。自分の都合に合わせ、人間の思い次第になる偶像神に従うのでしょうか。

今朝、私たちはエリヤの言葉から、改めて生ける神とともに生きていくことに心を向けていきたいのです。新約時代の私どもはイエス・キリストを通して、この生ける神と交わり、生きていくことが許されています。アドベントの週になりました。私たちのためにお生まれ下さった、贖い主イエス・キリストを見上げつつ、生ける真の神に導かれていきましょう。